FUEKI

vol. 77

公益財団法人 福武教育文化振興財団 機関誌「不易」

地道な活動、幅広い活動に光を当てる福武教育文化賞

3個人、2団体に贈る

2021年度の福武教育文化賞の式典は、昨年度と同様、コロナ禍で規模を縮小しての開催となりました。贈呈後、受賞者の皆さまからこれまでの活動、そしてこれからの活動について発表をいただきました。今年度も素晴らしい受賞者の皆さまをお迎えすることができ、改めて岡山県の教育文化活動のひろがりを感じています。

（2021年10月30日、岡山市内ホテル）

伝統文化を新しい視点で継承、復刻

軸原 ヨウスケ（グラフィックデザイナー、COCHAE代表・アートディレクター）

表彰理由

近年忘れられかけている伝統文化に光を当てて、民藝や郷土玩具などの周辺を発掘・再発見し、新たな価値を吹き込み再び世の中へ発信する活動は、エリアを超え県内外からも高く評価されている。独特な個性をいかしたグラフィック折り紙創作は、伝統文化の新しい視点による継承や復刻にもつながり、次世代を担う一人として注目されている。

また、『岡山発見かるた』のデザイン等を通して岡山の魅力を発信する活動は、岡山県の地域振興にも大きく貢献しており、今後の更なる活躍が期待される。

主な取り組みと実績

独学でデザインを始め、デザインユニットCOCHAEのメンバーとして「遊びのデザイン」をテーマに、紙のパズル、グラフィック折り紙、伝統文化に新しい視点を取り入れた玩具の開発、展示やワークショップ、書籍の企画・編集・デザイン等、幅広い創作活動を行っている。郷土玩具にも造詣が深く、企画執筆・デザインを手がけた『kokeshi book』は東北の伝統こけしを紹介したもので、第3次こけしブームのきっかけになったと言われている。

また、近年は「岡山名物きびだんご」（山方永寿堂）のパッケージデザインや、包んで完成する風呂敷の「福コチャエ」シリーズなども手がけている。企業のほか美術館や博物館とのコラボレーション企画も多数行い、岡山県立美術館主催の現代アート企画展「自由になれるとき 現代美術はこんなにおもしろい！」（2012年）など3点の展覧会ポスターは、グラフィック社が編集・刊行した『展覧会のグラフィックデザイン』（2015年）で紹介された。その他『岡山発見かるた』（2021年／岡山県）の図案とデザインなど、グラフィックデザインの範疇にとどまらない企画性あふれる活動を展開している。

受賞者の言葉

隙間のような文化を取り上げ、隙間のデザイナーとして活動してきたので、まさか自分がこのような立派な賞をいただけるなんて思ってもいませんでした。ただ「好き」の延長で続けてきた活動が多いのですが、「好き」を発信することで沢山の大切な出会いに恵まれ、今があるのだと改めて思いました。「好きなことを仕事にできていいですね」と言われることも多いのですが、「好き」を続け、発信することの裏に若干の苦労があることは余り知られることはなく、その苦労が少しだけ報われた気持ちになりました。

ちょうど受賞が決まる直前に福武文化賞受賞者（2018）でもある能勢伊勢雄さん（ペパーランド主宰）に岡山の話を聞く全5回のイベントを始めていたのですが、最後にいつも心にある能勢さんの言葉を紹介しておきます。

「覚悟して孤立すると理解者が現れ、新たな共同性が生まれる。孤立を恐れず勇気を持って行動すれば、おのずと本当の関係が開かれる」（2008年山陽新聞の取材の中での発言）

この言葉こそ「好き」を続ける秘訣なのではないかと思っている今日この頃です。

郷土研究と地域振興に大きく貢献

竹内 佑宜（郷土史家、公益社団法人 津山市観光協会 顧問）

表彰理由

郷土史家として地域づくりの中核的な存在であり、積極的に活動を展開している。作品や記録資料を調査・収集し、執筆および出版活動を続けるとともに、当時の人々の志や生き方を読み解き、年譜式の資料集やエッセイなど、さまざまなスタイルで情報を発信している。

個人的な研究のみにとどまらず、津山郷土博物館などとの情報交換、更には調査を終えた作品群の一括寄贈など、研究機関での継続的な活用を視野に進めており、時勢を見抜いた実行力で、岡山県の郷土研究と地域振興に大きく貢献している。

主な取り組みと実績

津山藩の文人画家や幕末の歌人をはじめ、美作地域ゆかりの人物について、長年にわたり作品や記録資料を調査・収集し、研究成果の執筆及び出版活動を続けている。かねてより研究を進めてきた幕末の津山藩士・鞍懸寅二郎について、津山市内の研究者及び墓所である本源寺が協同で「鞍懸寅二郎研究会」を組織し、『史料が語る津山藩士鞍懸寅二郎』を編集・発行した。氏は会長として編集に携わり、貴重な史料集の発刊にも尽力している。

また、多くの観光事業も手がけ、公益社団法人津山市観光協会の会長任期中は、「美作大茶華会」の開催、「津山市観光立市宣言」の議決、「津山観光マイスター」制度の創設など、また「B-1グランプリ」の開催やB-2の凱旋公演の歓迎プロジェクト等の実施に携わるとともに、津山城の鐘楼復元やさくら基金（桜の苗木植樹）の創設や、津山まなびの鉄道館の開館、SL「C11-80号」の津山駅前移設などにも尽力している。

特に、2015年に開催した「ロバートキャンベルさんと楽しむ秋の園遊会 衆楽の宴」は、キャンベル氏が『衆楽雅藻』を研究するため津山を訪れた際に、その原本と見られる肉筆の巻子《衆楽雅藻乾》を所蔵する氏と出会ったことが機縁となり、現在の衆楽園での「曲水の宴」の再現と、キャンベル氏を招いてのパネルディスカッションが実現したものである。美作地域の歴史に根差した催事の企画・運営により、地域文化の魅力を発信し、活性化につなげている。

受賞者の言葉

この度は名誉ある賞をお贈りいただきありがとうございました。受賞が決定したとのご連絡を受けたとき、大袈裟でなく、まさに晴天の霹靂でした。実は岡山県に、このような賞があることさえ、知りませんでした。早速、ネット検索して過去に受賞された方々の業績を拝見しました。どなたもが若く前途洋々、独創的な活動を展開されておられ、将来性豊かな方々ばかりではありませんか。そのような才能もセンスもない私が果たしていただいてよいのかと思いました。

表彰理由の要素のひとつは長期間にわたる郷土史への取り組みです。それは幕末期における無名の志士や歌人、画人などの顕彰活動が主な活動です。そしてそれらの研究事業を活かして、作州の観光振興にいささか寄与したというものです。それゆえに、この受賞は一面、多くの仲間や協力者と頂いたものであるとも思います。何れにしても、この受賞を期としてこれからも、もうひと頑張り、新しいことに挑戦したいと思います。そしてこれからも一筋の道を貫いて参りたいと存じます。

未来の音楽家育成図る若手ヴァイオリニスト

福田 廉之介（ヴァイオリニスト、一般社団法人 The MOST 理事長）

表彰理由

新進ヴァイオリニストとしての活躍にとどまらず、日本の若き才能豊かな音楽家たちで結成された室内オーケストラを主宰するなど、独自の活動を展開している。自身が辿った音楽人生から新たな若い音楽家の芽を育てることを目指し、岡山から全国、更に世界へと次の世代の音楽家を送り出すなど、まさに岡山の文化の発展・成長への欠かせないキーパーソンとして、その活躍はめざましいものがあり、岡山県の文化振興に大きく貢献している。

主な取り組みと実績

幼少から類まれなる才能を発揮し、国内外の数々のコンクールで優勝している。特に2013年のクロスター・シェンタール国際バイオリンコンクールでは全部門出場者中の最高得点奏者に贈られるForderpreisを受賞するなど、ジュニア時代から国際的にも高く評価されている。赤磐市内の中学校を卒業後、シオンの音楽学校をわずか1年で首席卒業し、飛び級入学したローザンヌ高等音楽院も首席卒業。

2020年には若干20歳の若さで、自身を中心に国内外で活躍する若手音楽家たちと室内オーケストラ「The MOST」を結成し、良質で敷居の低いクラシック音楽に触れる機会を提供することにより、未だ裾野の広くない日本におけるクラシック音楽の普及振興を図っている。また、10代以下の次世代を担う人材を対象に、本格的な演奏の場をつくることにより未来の音楽家の育成を目指すなど、更に活躍の幅を広げている。

新型コロナウイルスの影響を受ける中、第1回 The MOST日本公演は、東京・岡山・石川での開催を実現し、2021年10月には第2回The MOST日本公演を、広島・岡山・石川・東京で開催し成功へと導いた。国内外での活動を拡大する中、岡山を必ず帰るべき原点の地とし、毎年ソロ活動及びThe MOSTの公演の主要拠点として、岡山のクラシック音楽文化に貢献している。

受賞者の言葉

この度福武教育文化賞という名誉ある賞をいただき、身に余る光栄を感じております。松浦理事長をはじめ、日頃からサポートしていただいている全ての関係者の皆様に感謝申し上げます。

この2年間は、世界中で発生した新型コロナウイルスの大規模パンデミックにより、音楽家としての活動が限りなく制限されました。この苦境に立たされたなかで、私たちよりもさらに若い10代以下の音楽家たちが大きな舞台に立ち、彼らに演奏する楽しさを知ってもらいたい、という思いでその活動母体となる「一般社団法人The MOST」を立ち上げました。2020年に引き続き2021年も全国ツアーを行い、心の底から楽しそうに演奏する彼らの姿を見た時に、これこそ自分の音楽人生の命題だと強く感じました。

ただそこまでの道のりは決して簡単なものではなく、何度も色々な壁にぶつかりながら、転んでは立ち上がりの繰り返しでした。そしてそのたびに、たくさんの方が献身的にサポートしてくださったお陰により成功に導くことができました。

これからもヴァイオリニストとしてもさらに磨きをかけるとともに、微力ではございますが岡山の芸術、音楽に少しでも貢献できるよう引き続き努力する所存でございます。

障がい者が働きながら文化芸術を楽しめる環境を
NPO法人灯心会 スカイハート灯（理事長　藤原 恒雄）

表彰理由

長きにわたり、芸術と福祉の連携を実践され、継続的に展覧会を開催するなど、障がい者の方が働きながら文化芸術を楽しめる活動を展開している。信念を変えることなく、個人の特徴や特性を理解し、暮らしやすい環境づくりと、誰もが活躍できる場の実現に取り組む活動は、世界の流れにも合致し高く評価される。

またアートによる社会的自立、精神的自立を目指し頑張る姿やそれらの作品を鑑賞することで、次代を担う子どもたちの教育的成長にも大きな影響を与えている。

主な取り組みと実績

支援の必要な障がい者の方々に対して、自立した日常生活や、社会生活及び就労支援などに必要な事業や活動を展開し、福祉の推進を図るとともに、ノーマライゼーションの地域社会の実現に寄与することを目的として、「アートを通して自立を目指す」という創作活動を行っている。利用者の創作意欲を最大限に尊重した活動は、「絵を教える」のではなく「自由に描く」機会を確保し、また生み出した作品を展示し、多くの人に観てもらうことで創作する喜びを感じてもらう取り組みを行っている。

利用者であるアーティストが創作した作品は岡山県美術展覧会などにも出品されており、多数の入選・受賞をするなど、作品としての価値を積み上げることに取り組んでいる。更に創作した作品を販売することにより、自身の手によって生み出されたものが、評価されて利益につながるという喜びを経験できる仕組みづくりは、経済的な自立支援にもつながっている。

林原国際芸術祭 希望の星「モナリザを描くII」に作品が入選、入賞した際には、加計美術館で巡回展が開催されたが、県北からアーティストが来場することは困難であったため断念した。しかし多くの鑑賞者に自身の作品を見ていただく喜びを実感してもらいたいという強い想いから、地元真庭市で「モナリザを描く」展の開催を実現させるなど、アーティストの心に寄り添った支援活動を行っている。

受賞者の言葉

とても光栄な賞をいただきまして、誠に有難うございます。日ごろから灯心会の活動にご理解を示し、ご助力くださっている方々に対しても、この場をお借りして、お礼を申し上げます。これまでコツコツと活動を継続してきたことで、共に活動する仲間の、作品制作に対するモチベーションも上がり、個展等を通じて、皆さんに注目していただけるようになったと思っております。彼らの作品を観た方の中には、他の作品や作者に会いたいと、アトリエに来られることもあります。様々な方とのコミュニケーションの機会を得て、作品を見ていただき評価されることで、更なるやる気に満ち溢れてゆくのです。

今後も、仲間たちと創作活動はもとより、様々な活動を通じて、ノーマライゼーションの実現を目指し邁進して参りたいと思います。皆様、今後とも何卒宜しくお願い致します。

幅広い世代が学び、国際交流活動
たまのスチューデントガイドプログラムチーム（代表　妹尾 均）

表彰理由

小中高生が瀬戸内の魅力を学びながら、社会に向けて発信していく活動を行うことで、国際理解・地域創生への関心、主体性や英語力、コミュニケーション力の向上につながっている。メンバーが入れ替わる中、継続的に活動を行いながら、設立から延べ600名を超える児童生徒等がプログラムに参加しており、その実践力と教育的効果が高く評価されている。今後の社会教育モデルとしての広がりと、岡山県の地域振興への貢献が期待される。

主な取り組みと実績

岡山県玉野市を拠点として、～宇野港を教育フィールドに～をテーマに掲げ、「地域で学ぶ空間が、玉野を良く知り地域とのつながりを意識するきっかけに」「小中高大の子どもたちが一緒に学ぶ空間が、自分の夢や目標を持つきっかけに」「外国人と話す機会が英語を学ぶ意味を考え、国際感覚を養うきっかけに」という3つの要素を取り入れ、幅広い世代と一緒に国際交流活動を実施している。実践的な英語教育の場として、外国人観光客が多く訪れる宇野港・宇野駅で、おもてなし活動や交流を体験することにより、子どもたちの学習意欲や地域に関する興味関心の向上にもつながっている。

また、プログラムの参加者を固定することなく、幅広く参加の募集を行うことで多くの小中高生がプログラムに参加し、更に支援者としてALTや海外からの留学生、外国人ボランティアにも参加してもらうことにより、国際交流の機会が増え、外国人参加者に瀬戸内の魅力を知ってもらう機会となっている。連携してプログラムを実施する地域のガイドボランティアからは「子どもたちがおもてなし活動に関わることによって、地域が元気になる」などの感想があり、地域の方の生きがいづくりにも効果が見られている。

新型コロナウイルスの影響が拡大する中、外国人留学生や地域ボランティア団体等とオンラインによるプログラムを実施するなど、活動を絶やさない努力を重ね、2022年に向けて意欲的に活動を続けている。

受賞者の言葉

この度は栄えある賞をいただきまして、誠にありがとうございます。たまのスチューデントガイドプログラムは瀬戸内国際芸術祭の開催を契機に、2017年にスタートし、今年度で5年目を迎えます。プログラム開始後から多くの子どもたちが参加し、玉野や瀬戸内の自然、アート、人々と関わりながら、国際交流を通じて、様々なことを学んできました。参加した子どもたちが触れた、国籍を問わない人々との出会い、瀬戸内の空気は、一生の宝になると感じています。プログラムをきっかけに自ら活躍の場所を広げる子どもたちも多くいます。

コロナ禍の中、活動が難しい場面も多くありますが、ふるさと玉野、瀬戸内、そして世界中の人々を愛する子どもたちをこれからも育てていきます。

オンラインで活発に交流・情報交換

2021年度「助成成果報告会」と「テーマ別情報交換会」

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、本年度もZoomによるオンライン成果報告会を行いました。コロナ禍で活動を広げる場が少なくなっている現状を踏まえ、出来るだけ多くの活動を聞いていただこうと4日間にわたり2020年度に教育文化活動助成を受けられた32団体・個人に発表していただきました。4日間で延べ192名という参加者を迎え、盛会のうちに終えることができました。

教育文化活動助成成果報告会

11月26日のZoom成果報告会

	11月12日(金)	11月13日(土)	11月26日(金)	11月27日(土)
1	NPO法人マザーリーフ	みんなのおウチ 運営委員会	D-INTERNSHIP 実行委員会	一般社団法人 お互いさま・まびラボ
2	SHARE & CHILL !!!	つるつる会	岡山御津高校 探求学習検討委員会	子育て広場まんなか
3	ワケタウンシネマ 実行委員会	穏子ども会	あかいわ美土里の和	NPO法人こくさい こどもフォーラム岡山
4	特定非営利活動法人 スマイル・ちわ	特定非営利活動法人 未来・みまさか	玉野高校 地域連携推進チーム	SHINONOME Kitchen
5	特定非営利活動法人 f.saloon	中庄の歴史を語り継ぐ会	大茅地区活性化協議会	宇治学園地域連携研究会
6	国吉康雄のアートと歴史で 小学生の自己理解を深める プロジェクトチーム	方谷研究会	環境学習を通じた 人材育成・まちづくりを 考える協議会	NPO法人だっぴ
7	井原市ひとづくり 実行委員会	#おかやまJKnote	山地真美	一般社団法人岡山に 夜間中学校つくる会
8	560の夢プロジェクト 実行委員会	おかやま親子 応援プロジェクト	認定NPO法人 ポケットサポート	玉野みなと芸術フェスタ 実行委員会

※団体名は2020年度当時のもの

どの発表も聞いていてワクワク

―審査委員のコメント

- 顔の見える距離で繋がりながら、いろいろな世代の人が関わって活動をしている点がそれぞれの発表から見られ、とても重要なことだと思った。コロナ禍の厳しい状況の中様々に活動を展開されていることに感心した。今後も是非頑張っていただきたい。
- 地域の中での助け合いが減少していく中、人が集まって人が動く、心が動き、地域・コミュニティの活性化につながっていく様子がよく分かった。地域の中心となり場づくりコミュニティづくりをして、人間の横のつながりを作っていくことは大変重要だと思う。
- 活動を広げる上で知ってもらうこと、伝えることはとても重要。みなさんの発表はとてもスムーズで完結だった。これから活動を続けていく中で、他の方の力を借りることも大切なこと。どんな力が借りられるだろうか、ということを意識していただきたい。
- どの発表も聞いていてワクワクするものだった。学ぶことを貴ぶ方の多さを実感した。「学ぶことを大切にする」という文化を育てることが大事。学ぶ気持ちを社会がどれだけ応援できるかが地域の力だと思った。この成果報告をもっとたくさんの方に聞いていただきたい。

様々な活動を連携、協働できるように

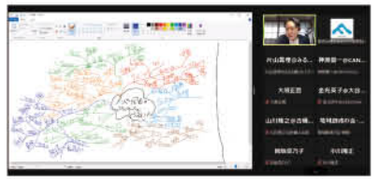
―参加者の感想

- 皆様のご活躍を拝見して、自分自身とても励みになったし、自分たちが行っている活動だけでなく、それぞれの皆様の活動において何か自分にもできることはないかなと改めて見つめ直すことができる有意義な時間でした。ありがとうございました。
- 次年度は新型コロナウイルスも落ち着き、参集で行いたいと思いました。
- コロナ禍の中、オンラインで成果発表会が開催できたことに意義があると考えます。むろん、対面でわかること伝わることはあると思いますが、この形式であっても発表者から団体の熱意が伝わり、活動の様子を十分うかがうことができました。
- 司会の方の最後の感想も的を射ており、素晴らしかったです。
- Zoomであることや、日時が選べたことで、大変助かりました。
- オンラインなので、自宅でリラックスして拝見でき、とても良かったです。
- 発表団体と審査委員の距離が近い印象を受けた。
- 各団体が繋がり合い、様々な活動を連携、協働していけるようになれば、すばらしいと思いました。
- 一人でも多くの市民に聞いてもらいたいと思います。
- 昨年度よりも発表者が多い構成だったので、全体的なリズムも良く、お互いの感想意見の交流がしやすかった印象でした。
- 直接メッセージでいただくご意見・ご感想がこれからの活動に向けての励みになりました。ありがとうございました。
- 会場を借りての報告会もよいですが、ネット上での発表は参加しやすいのでもっともっと大勢の方が参加できる可能性があり大変良いと思いました。

（参加者アンケートから抜粋）

より深く有意義な時間に　テーマ別オンライン情報交換会

交流会につきましては、「テーマ別オンライン情報交換会」として、先行している事例紹介とブレイクアウトルームを活用し話し合いの場を3回設けました。参加者は少なかったものの深いところまで話ができ有意義な時間となりました。



1	11月20日(土)	テーマ： 活動資金について	うのずくり実行委員会 代表　森　美樹
2	12月4日(土)	テーマ： コロナ禍におけるオンラインの活用について	一般社団法人 高梁川流域学校 代表理事　坂ノ上 博史
3	12月1日(水)	テーマ： 学校、地域、行政との連携について	NPO法人だっぴ 代表　森分 志学

参考になる話に刺激もらいました―審査委員の感想　山川隆之/吉備人出版　代表

各回とも活動してきたことによる事例をもとに「聞きたいこと」をわかりやすく、丁寧に紹介してくれました。森さん（うのずくり実行委員会）の活動記録を年表にまとめることや坂ノ上さん（高梁川流域学校）のオンラインの活用による新たな事業創出、森分さん（だっぴ）の自分たちの活動内容を言語化することの大切さなど、参加者のみなさんとても刺激を受け、参考になったのではないでしょうか。

地域学のススメ

次世代の育成のために 地域社会と学校がパートナーになる

地域の課題を自らの課題と捉え、地域の人たちと関わりながら、主体的に課題解決に取り組む学習「地域学」。「高校生と地域」の取り組みは全国的に注目されています。このコーナーでは、財団が応援している高校生の「探究活動」の事例を紹介します。

源平水島合戦に着目、日食を再現し藤戸合戦を観光資源に

三宅範行（一般社団法人未来創成学院 理事）

一般社団法人未来創成学院では、県内外の複数の高校の探究活動のお手伝いの他、探究授業現場の先生のお悩みを一緒に考えたり、探究活動をしてみたいという高校生個人に伴走したりしています。

地域を舞台にした探究活動では、高校生が地域に出かけて興味あるテーマを調査し、課題の解決方法を考える場面が多くあります。地元の方々とのお話を通して、高校生が自分を育んでくれた地元の魅力を再発見し、どれほど地域の方々に愛されているかも知る機会になっています。不登校・引きこもりの生徒がこの過程で明るさと自信を取り戻し、将来は地元に恩返ししたいと国立大学に進学したケースもあります。

探究活動は高校生が劇的な成長を遂げる機会なので多くの高校生にチャンスをつかんでほしいと願います。そこで今年度は全国の皆様から寄付をいただいて探究講座を開講しました。在籍高校も様々で、高校生は各自のテーマに取り組んでいます。その中で源平水島合戦に着目して合戦当日の日食を再現しようとする高校生と、能「藤戸」で有名な藤戸合戦を観光資源にしたいという高校生がチームを作りました。

折しも、福武教育文化振興財団様から高校生が自分で企画して申請すれば企画遂行を助成するとのお話を頂戴していました。高校生たちに投げかけたところ、全て自力で申請書を書き上げ、助成いただけることになりました。彼らは11月13日には源平水島合戦を体感するツアーを実施し、2022年2月6日には源平藤戸合戦の史跡を訪ねて能「藤戸」を鑑賞する企画を立てています。

先般の水島合戦に関するツアーでは参加の皆様に温かい目で見守っていただき、感謝しております。企画実施したからこそ、至らぬ点にも気づけた学び多いツアーでした。感動や感謝、失敗など様々なことが若い感受性豊かな高校生の学びになっています。

参加者の受付をする高校生

船内で水島コンビナートについて説明

プラネタリウムでごあいさつ

三宅範行さん

史跡見学と能「藤戸」を鑑賞 伝統文化に触れる観光プラン 新たな地域の魅力を次世代に

団体名 地域の魅力発掘委員会

活動テーマ 「倉敷市内で起きた源平合戦にまつわる観光ツアー2プランの実施」

活動について

「2021年11月に水島プランを実施、2月に藤戸プランを実施します。水島プランは、実際に戦いの地となった水島から玉島までを船で巡り、玉島地区の歴史愛好家の方にお話を伺った後、プラネタリウムで戦いの勝敗を分けたといわれている金環日食の映像を見る体験ツアー。藤戸プランは藤戸史跡保存会の方をガイドに迎え、藤戸の史跡を見学後、倉敷芸文館で行われる能「藤戸」を鑑賞するという日本の伝統文化に触れる観光プランです。新たな町の魅力を高校生らしい視点で発見し、若い世代が手軽に地元の歴史や文化、日本の伝統文化を学び、次の世代へ繋いでいく架け橋となるようなプランを考えました。」

彼らは探究内容をビジネスプランとして発表し、全国的にも高い評価を得ています。

①高校生みんなの夢AWARD2　グランプリ
（公益財団法人みんなの夢をかなえる会 主催）

②岡山イノベーションコンテスト　審査員特別賞
（中国銀行・山陽新聞社・サンマルク財団 主催）

③第9回高校生ビジネスプラン・グランプリ
セミファイナリスト（ベスト20）（日本政策金融公庫 主催）

勝まりなさん（倉敷古城池高校）

「歴史を繋ぐ大切さを学びました。これまで源平合戦の詳細を知りませんでしたが小中学生も同じだと思います。社会見学等に地元資源の「歴史」を組み込むことで次世代へ繋げられます。ぜひ案を活用してほしいです。ご協力いただいた地域の方々に心から感謝致します」

丸口天音さん（倉敷古城池高校）

「高校の探究学習の発展として今の活動に参加しました。今まで経験のないクルーズガイドなどの活動を通して地域の人の優しさに触れることができ、つながりの大切さを実感し、そのつながりを今後も大切にしていきたいと感じました」

吉田由良さん（倉敷古城池高校）

「得られたのはプレゼン能力の向上です。大勢の前で話す経験のなかった私が、今では効果的なプレゼンを考えることが楽しいとまで思えるようになりました。伝わった！と感じられた時の喜びは格別です。私の「好き」がみつかりました！」

尾崎光さん（岡山大安寺中等教育学校）

「活動全体を通して、地域課題を発見し、その解決策を考え行動を起こすこと自体の楽しさを知りました。一高校生の自分が大人のもとへ企画書を持って伺う、というのは、緊張と不安が大変大きかったです。けれど地域の皆さんはいつも真剣に話を聞いて下さり、その温かさを感じることができました」

尾崎光さん、吉田由良さん、勝まりなさん、丸口天音さん

活動をはじめた理由

「身近な『食べる』が自然と直結していることを体験」

文・田辺綾子
／エディブル・エデュケーション岡山研究会 代表

「EDIBLE Lab. サマーワークショップ」
自然に配慮した持続可能なスタイルの食育菜園を学校教育の場に取り入れ、菜園をハブに地域と学校の新たなコミュニティづくりを目指すとともに、食育菜園授業（エディブル・スクールヤード）を普及させるための人材育成を行う。

植物との暮らしは30年になります。たくさんの専門書を取り寄せては試すことを繰り返していくうちに、植物以外にも土壌や生態系のことを知るようになり、完成された自然界の摂理に感動と畏敬の念を抱くようになりました。

習い事の講師をしていたのですが、子ども達の異変を感じていました。ある日、6歳の子に「ママのお弁当のおかずで何が好き？」と尋ねることがあったのですが、アニメのキャラクターの名前を答えるのです。キャラ弁のことらしい。「それって卵で出来てる？」と尋ねると、「わかんない」と。その子は、キャラクターに象られたおかずがどんな食材で作られているのか、わからないまま食べていることに愕然としました。親の愛情弁当が、そんな皮肉を招いているなんて。ほかにも、唐揚げを自分で作れることを知らない子もいました。

便利なものに依存した環境下で五感を使った体験が減り、選択肢が少なくなっていること、「知識」を生きる「知恵」に変換できない子どもが増えていることを察し、危機感を覚えました。

多様性があるゆえに矛盾も抱えたまま、悠々としている自然界の包容力。生きていこうとする健気な姿や、したたかな戦略。こうした自然界の逞しさと子ども達を繋げたいと思うようになりました。

人間には「バイオフィリア」という自然と繋がりたい本能があります。子どもは正直で、すぐにエディブル教室の虜になります。身近な「食べる」行為が自然のダイナミックな営みと直結していることを体験することで、子ども達の「生きる力」が大きくしなやかに育まれることを願っています。

収穫前の緑色の鞘の小豆が何色か、初めて見るのに身を乗り出す子どもたち

「『出会いの選択肢』を増やしたい」

文・井方克明
／Bank Gallery @ENTER WAKE 代表

「[芸術を身近に]学生等と作る和気町における文化の拠点づくり」
世代や立場を超え、アートや文化をキーワードにした新しい交流を生み、そこからさらなる創造を喚起するための場として、JR和気駅前多目的施設「ENTER WAKE」内にモノづくり・芸術・文化活動の発表拠点を学生と地域の方たちでつくる。

私の生き方に最も大きい影響を与えた出来事の一つに、とある芸術家との出会いがあります。その人は丸太一本をノミだけで彫り上げる木彫作家で、進路について思い悩んでいた時期で、「世の中にはこんな選択肢もあるのか！」と衝撃を受け、視界が開けた瞬間でした。このような出会いがもたらす人生の転換点は、誰にとってもいつ訪れるかわからないもので、それが若い時期であればより意味の大きいものとなるはずです。

しかし、このような出会いの場というものは、地方では選択肢が限られるのが実情です。2020年に子どもが自然に囲まれのびのび育つ環境を求めて岡山県和気町という田舎町に移住してきました。和気町は自然や制度、人の温かさなど、とても素敵な環境です。しかし、特に子どもたちにとっての出会いの場は多くはありません。「出会いの選択肢」を、なんとか田舎町でも増やしたいと思い、この活動を始めました。

表現することのすばらしさは、自分のことを見つめ直す力が身につくこと。そして、自分の思いを整理することやその思いを他者に伝えるためにも役立ちます。その能力は、普段の生活や仕事にも活かすことができると考えています。

また、表現者としての視点を持つことも重要です。普段何気なく過ごしていると、見過ごしてしまう自然も、ただの景色と化した人間が作ったものも、造形物として視点を変えて見ることができれば、新しい発想を生み出すことができると考えています。敷かれたレールの上を進んで社会に出て働くだけではなく、創造しながら生きていくことでより豊かな社会、人生を送ることにつながると思っています。将来、子どもたちがこの町を、自分たちの生活を豊かにしていくために、表現行為が持つ想像の力が必要な要素になると確信しています。

ギャラリー作りワークショップ【照明設備編】

FACE

飛島ガーディアンプロジェクト　代表

日置幸さん

″若者が島に通い続ける″がつなぐ島の幸せ。

教育と地域振興を掛け合わせて、若者が島の人たちと関わり続ける「飛島（ひしま）ガーディアンプロジェクト」。若者が島民を支えるという一方通行な在り方ではなく、若者が島の暮らしとともに在るというプロジェクトを牽引する日置さんにお話を伺ってきました。（取材・文／森分志学）

飛島は笠岡諸島の中で一番規模が小さな島で、高齢化率80％後半、居住人口40名弱の限界集落です。日置さんが飛島に関わり始めたのは、興譲館高校のスタッフをしていた頃。学校のカリキュラムで、生徒の引率として飛島を訪れました。

生徒たちや日置さんにとって、飛島は特別な場所となりました。草刈りをして島の人たちから「ありがとう」と言われたり、何気なく話しかけてくれたりすることで、生徒たちはどんどん明るくなっていったと日置さんは話します。そんな元気をもらった飛島も、生徒が卒業してからは訪れなくなりました。半年後、日置さんの声掛けで「島に恩返しがしたい」と思っていた卒業生たちが集まり、彼らはガーディアンになりました。

「飛島ガーディアンプロジェクト」に関わる若者は現在11人。月1回の頻度で島に来ます。1年目はお祭りなど島の行事に参加し、まずは島を知ることから始めました。2年目は貸してもらえた畑で野菜などをつくりました。畑のアドバイスをもらったり、島の人たちとのコミュニケーションを深めました。3年目となる今年度はアミューズ会を開催。島の人たちの集うきっかけがなかったところに、新たな交流機会をつくることができ、好評だったようです。

「若者たちが来ることによって、島の人たちが喜んでくれる。通うことに意味がある」と日置さんは言います。通い続けることの真髄は、島の人たちの幸せの維持です。日置さんは「すでに島の人たちは幸せだと思って関わる」ことを大切にしています。島の人たちは若者たちがいなくても十分に幸せ。しかし、その幸せが老化や怪我などで突然続かなくなる瞬間が訪れるかもしれず、その突然に対して、通い続けているガーディアンなら手を差し伸べることができます。そうした存在であり続けるためには、「通い続けること」に尽きるのです。

日置さんは「自分たちが役割を探しているうちは役割がない。役割は振ってくる」とも話します。島の人たちが年を重ねていくのは決まっている未来。島の人の役割を奪うわけでなく、彼らから「もうこれできんわ。よろしくね」と言われるタイミングがいつ来てもいいように日々学んでいます。

そのため、島に若者が通える環境を整えることは重要です。現在は、ガーディアンの拠点づくりを目指し、行政と協力して空き家調査も行いました。若者たちは、教育を入口として島に関わり、まずは島から″与えられ″て、島に通い、島の人とともに在ることで地域振興を″支える″。そんな循環を飛島ガーディアンプロジェクトはつくっているのだと思います。

日置 幸　hioki miyuki
飛島ガーディアンプロジェクト　代表
1994年、岡山県矢掛町生まれ。高校中退、通信制大学で教員免許を取得。塾講師。2018年通信制高校卒業生らとともに飛島ガーディアンプロジェクトを設立。離島を「ふるさと」のように想う若者の存在が、離島の新たなエネルギーとなるよう、若者の居場所作りに邁進。教育による離島振興モデルの構築を目指す。2020年飛島地区集落支援員。2021年一般社団法人飛島学園。フリースクール育海（はぐくみ）統括リーダー。（写真左）

森分志学　moriwake shigaku
NPO法人だっぴ　代表理事
1990年、岡山県倉敷市生まれ。大学3年生の頃、自分が受けてきた高校の進路指導に違和感をもつ。それをきっかけに、高校が大人と出会い、将来を考える対話の場を高校生とともにつくる。卒業後は、教育系の広告代理店に勤務。2017年、NPO法人だっぴの理事・事務局長として岡山にUターン。岡山の中高生・大学生を対象に、キャリア教育プログラム「中学生・高校生だっぴ」を岡山県内外12市町村20校以上の学校で展開。2020年より現職。（写真右）

---

vol.13　and F 教室　体験記

RESASの基本の「き」を学ぶ ―ビックデータを活用してみませんか？

開催日：2021年10月9日

黒部麻子／ライター

「RESASの基本の「き」を学ぶ」では、ビックデータを活用してみましょうと、オンラインで開催しました。その体験を黒部麻子さんにレポートしていただきました。

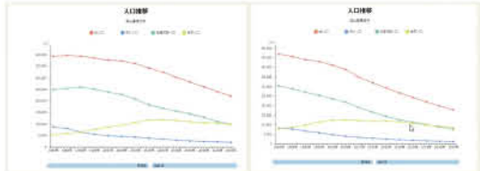
みなさん、RESAS（リーサス）ってご存じですか？

経済産業省と内閣官房（まち・ひと・しごと創生本部事務局）が提供している地域経済分析システムで、産業構造や人口動態、人の流れなどのビッグデータが集約されています。インターネットでRESASにアクセスすれば、誰でも無料でそれらのデータを見ることができます。

今回の講師は、倉敷商業高校の川崎好美先生。統計データというと、何やら難しそうなイメージですが、高校の授業（総合的な探究の時間）でもこのRESASを使っていて、「地方創生政策アイデアコンテスト2019」で同校は地方創生担当大臣賞を受賞しています。小学生のお子さん息子さんも、夏休みの自由研究にRESASを役立てたそうです。

「RESASで見えてくるのは『鳥の目』のように、俯瞰的な視界です。『だいたいこんな感じ』というざっくりとした把握をするのに適しています。」

そう川崎先生は語ります。



左が浅口市、右が高梁市

その後は実際にRESASを見ながら、どんなデータから何が読み取れるのかを解説していただきました。たとえば、浅口市と高梁市の人口推移のグラフ（※左が浅口市、右が高梁市）。

一見、どちらも似ているように見えますが、生産年齢人口（緑）と老年人口（黄）の交点は、浅口市は2045年、高梁市は2035年。老年人口が年少人口（青）を上回るタイミングも、高梁市のほうが約10年早い。そう考えると一口に人口減少問題といっても、対策が求められるスピード感は自治体ごとに違ってくるはずです。

また、岡山県内だけでなく、さまざまな自治体のデータが登場しました。「ビジネスでは自分の得意分野ばかり取り組めるわけではない。だから、あえて自分の良く知らない土地のデータ分析をすることが大事」と川崎先生。たとえば福岡県うきは市は、従来から観光PRをしてきましたが、RESASを使った分析により、福岡市から訪れる観光客が想定より少ないことが判明し、佐賀や大分といった近隣地域に向けたPRに注力するようになったそうです。データによって戦略を変えた実例です。

「人口問題ひとつとっても、日本や先進国【日本をはじめとする先進国or先進国】では少子化ですが、世界的に見れば人口は増えていて、人口爆発が問題になっています。ですから、対話をするためには、前提をそろえることが大事です。そのためにデータを使い、エビデンスに基づいて考える。その力は、今後どんな分野でも役立つはずです。RESASは背景が黒くてとっつきにくいイメージがありますが、そうした思考を育むうえで、とても良い教材だと思います。」

川崎先生の力強い言葉に深く頷きました。

講師：川崎好美氏
岡山県立倉敷商業高等学校教諭
（教科：商業）
1977年津山市生まれ。津山商業高校、勝山高校、平成20年、玉野商業高校（現：玉野商工高校）高校生おむすび「玉結び」の企画・販売を手がけた。現在は、倉敷商業高校勤務。教科「商業」。令和元年度は「地方創生☆政策アイデアコンテスト2020」にて「朝ごはんに商機あり！温羅めし」が最優秀賞である地方創生担当大臣賞を受賞した。内閣府RESAS専門委員。

百々（どうどう）地区で生まれた土人形

昭和8年(1933)頃から、百々の地で作られるようになり、平成初期まで制作が続いていた土人形「百々人形」。表紙のイラストは制作当初の「獅子頭」という、代表的な作品です。

一旦途絶えましたが、人形作りを見て育った地域の人たちから声があがり、平成6年(1994)、数人が土人形の試作に取り組み始め、平成21年(2009)10人ほどのメンバーで「百々人形保存会」を立ち上げ、調査、保存、継承へと活動を開始、展開しています。

制作拠点にしている北和気郷土資料館に、昭和の時代に制作されていた人や動物など約250点余りの土人形を常設展示しています。現在の活動は、学校や児童館、公民館、福祉施設、地域のサークル、老人会などに出向いて、粘土での型作りや絵付けの講座をし、最近では、人形色付け体験バスツアーの受け入れもしています。〝世界にひとつだけの土人形〟として、なかなかの好評です。

また、地元美咲町内で生まれてくる赤ちゃんに、縁起物として赤い土鈴ダルマを進呈する活動を9年間続け、定着してきました。

人形作りが始まってから90年近くが経過し、生活様式も大きく変わってきている中ですが、昔ながらの製法で素朴な土人形を、みなさんも是非一度体験してみて欲しいと思います。

福井　正
FUKUI tadashi
百々人形保存会　代表

1947年岡山県久米郡美咲町生まれ。2009年4月まで美咲町役場に奉職の後、北和気地区コミュニティ推進協議会会長並びに、美咲町北和気郷土資料館館長。推進協議会会長は2018年3月まで、館長は現在に至っている。2009年4月、百々人形保存会を立ち上げ、同年9月から保存会代表として百々人形の継承活動に取り組んでいる。2011、2013年度福武文化活動助成を受ける。

百々人形
https://www.dodoningyou.club/

題名「不易」には、「時代を超えて優れたものに共通する本質的なもの」を大切にしたいという谷口澄夫初代理事長の思いが込められています。

■大晦日恒例のNHK紅白歌合戦は、藤井風さんが圧倒的にカッコよかった。岡山県里庄町の実家からという前代未聞の出演や突然の登場という演出もびっくりした。初出場の新人ながら、あれだけのパフォーマンス、存在感を示すことが出来たのは、やはり彼自身の実力だと感じて、豊かな気持ちで眠りについた。■彼は、10年以上前からYou Tubeという動画配信サービスに演奏風景を上げ続けて今日に至る。思いがあれば、東京以外の地方都市からでも十分に新しい発信をすることが出来る可能性を感じる。■Facebookは中高年で、若い人はInstagram中心とかいわれている。様々なツールに馴染む間のないまま翻弄されることもあるが、何も焦ることなく変化を楽しみたい心境だ。■前年に引き続き、助成団体の「成果報告会」はオンラインでの開催となった。今回は発表希望の団体が多く、前回の4倍にあたる32団体が発表した。You Tubeにも公開しているので、ぜひ視聴いただきたい。■今回から公募助成は、「電子申請」の本格的な運用に変更した。簡便になったといわれる一方で、わかりにくいとのご指摘もいただくこともあり、途中で改善も行っている。また財団のWebサイトを来年度に向けてより活用していただけるよう大幅改善する準備をすすめている。一層お役に立てる財団になるべく、色々と改善しているので、お気づきの点などご意見をお寄せください。本年も引き続きよろしくお願いします。(O)

人づくり、地域づくりを応援します
公益財団法人 福武教育文化振興財団
FUKUTAKE EDUCATION AND CULTURE FOUNDATION

〒700-0806　岡山市北区広瀬町1番5号
株式会社ベネッセコーポレーション広瀬町社屋
TEL：086-221-5254　FAX：086-232-3190
URL：http://www.fukutake.or.jp/ec/
E-MAIL：eczaidan@fukutake.or.jp

機関誌 不易 FUEKI vol.77 2022.1.25

編集・発行：
公益財団法人福武教育文化振興財団
制作：株式会社吉備人
デザイン・イラストレーション：タケシマレイコ
印刷：研精堂印刷株式会社